HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	1993年サハリンにおけるウスチアインスコエ遺跡の調査
Author(s)	山浦, 清
Citation	北海道大学総合博物館研究報告, 1, 33-40 オホーツク文化形成期の諸問題 = Problems on the formative stage of the Okhotsk culture
Issue Date	2003-03-31
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/38397
Type	bulletin (article)
File Information	no1_p33-40.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

1993年サハリンにおけるウスチアインスコエ遺跡の調査

山浦　清

Archaeological Research at the Usti-Ainskoe Site, Sakhalin in 1993

YAMAURA Kiyoshi

We excavated a small area of the Usti-Ainskoe Site in 1993. We found a pit dwelling, which was partly destroyed by the changes in the course of the Ainskoe river. Judging from the pottery discovered there, the dwelling dates back to the period of Susuya pottery and Esutoru pottery types. The ground plan of the dwelling, the positions of the post-holes and the location of the fire place are similar to those of the Okhotsk Culture dwellings. They indicate that the Susuya and the Esutoru people had close cultural relations with the Okhotsk culture people.

1 調査の背景（Fig.1）

ここで報告するのは，1992-1993年度トヨタ財団研究助成によって実施したサハリン州ウスチアインスコエ遺跡における発掘調査の概要である。調査には，日本側から報告者以外に前田　潮・石田　肇・西本豊弘・加藤博文・松本建速氏らが，ロシア側からはB.ゴルヴェフ・A.ワシリェフスキー氏らが参加した。実際の発掘調査は1993年8月14日より23日にかけてである。我々の大きな関心は，オホーツク文化がいかに成立したか，その過程の解明であった。そのためにはサハリン島における鈴谷式期あるいは恵須取式期とされる時期の文化内容の把握が，最も重要なポイントである。さらに大局的な観点からするなら，アニワ湾沿岸部より，より北の地域で調査を行う必要があると考えていた。また1991年8月，木村英明氏を代表としたサハリン島一般踏査の際，山浦・前田はウスチアインスコエ遺跡を訪れる機会を得た。その際，今回報告する地点が，我々の関心に答えてくれる可能性を持つ遺跡と考えるに到っていた。

2　遺跡の概要（Figs.2-5）

当遺跡はサハリン島西海岸，サハリン島の最もくびれた部分から北へ50kmほど行ったクラスノゴルスク（旧：珍内）の北にある。すなわちアインスコエ湖（旧：来知志湖）と海の間に形成された長さ10km以上の砂州上には多くの竪穴が確認されている。この砂州の幅はおよそ500mほどであり，3，4列の砂丘列が認められる。アインスコエ湖から流れ出たアインスコエ川（旧：来知志川）は5kmほど南流し，クラスノゴルスクの市街から海に注いでいる。発掘地点は，その川が湖から流れ出る地点に近く，その北・東側は河川浸食を受けている。当遺跡に関しては，第2次世界大戦以前には，伊東信雄・新岡武彦氏らが調査を行っており，戦後においては1972年にシュービン氏らが調査されている。

3　検出された竪穴住居（Figs.6-8）

断面図に見られるとおり，本竪穴は表面的には平坦である。ただし5層有機物層とした層中には，畳あるいはむしろ状のものが含まれており，かっては6層を表土として，窪んだ状態であったと考えられる。竪穴北側・東側は来知志川によっ

Correspondence to: Dept. of Museology, Rikkyo University, Nishi-Ikebukuro 3-34-1, Toshima-ku, Tokyo, 171-0021,Japan. E-mail yamaura@rikkyo.jp

て浸食を受けているが，東西4.9m，南北4.25mほどの部分が残存していた。西壁にやや近いが，23cmほどの深さの緩く窪んだ部分が炉とされよう。そこから多くの土器片が検出された。西端部の柱穴（深さ31cm），それと炉址を中心として対称的な位置にある柱穴（深さ88cm）を結ぶ線が竪穴中軸線とすると，本来の南北幅は6.8mと推定される。海側へ向かう西壁が，やや外側に張り出している点は興味深い。側溝がめぐり，さらに南壁から1.5mほど離れて柱穴が検出されており，これらはあるいはコの字形に竪穴を区画するかとも推測される。こうした諸点は，オホーツク文化の竪穴住居を想起させる。

4　検出された遺物（Figs.9-11）

竪穴住居出土の土器には数点は混入と考えられるものもあるが，多くは当竪穴床面出土である。口頸部文様の特徴から大きく2群に細分される。Ⅰ群は縄線文を持つものである。1-14がこれに属する。1-11・14は口縁部片，12・13は胴部片。9は口唇部近くに櫛歯状の刺突文を，10は縄線文の下に爪形刺突文を持つ。11は口唇近くに貫通孔列を有し，さらにハの字形に櫛目文が施されている。Ⅱ群は櫛目文を持つものであり，15-23がこれに属する。15-20・22は口縁部片，21・22は胴部片。19・20は櫛目文以外に，円形あるいは逆U字形の刺突文を併用する。上記以外，次のようなものがある。すなわち，24は口縁部片，三角形の刺突文を持つ。口唇部に 縄文を有する。25も口縁部片，型押文の一種とされるが，原体が特徴的である。24・25はⅡ群のヴァリエーションと理解することも可能であろう。26は南貝塚式土器。27は口縁部は無文，その下に隆帯が付けられ，その上に刺突文，下方には櫛目文を持つ。また口縁内側には円形刺突文が二列認められる。28-32は底部片である。竪穴出土土器の大半をなす上記Ⅰ・Ⅱ群は，一般に鈴谷式土器あるいは恵須取式などとして理解されるものである。なお石器類は，全くと言っていいほど発見されなかった。

まとめ

上記報告のとおり，ここに紹介した竪穴住居は，鈴谷期あるいは恵須取期の竪穴住居とすることができる。さらにそこに，オホーック文化期の竪穴住居として知られるものとの共通点が指摘される。こうした点は，オホーツク文化成立過程を考えるうえで注目すべきデータである。

参照文献

山浦　清　1985「樺太先史土器管見（Ⅰ）」『考古学雑誌』Vol.71，No.1：44-68

山浦　清　1986「樺太先史土器管見（Ⅱ）」『考古学雑誌』Vol.71，No.3：42-60

山浦　清　1990「根室市博物館開設準備室所蔵のサハリン出土資料」（加藤博文共同執筆）『根室市博物館開設準備室紀要』No.4：16-23

山浦　清　1993a「環オホーツク海文化という視点」『北海道考古学』No.29：9-20

山浦　清　1993b「環オホーツク文化の可能性を求めて」『彷書月刊』4月号：16-17

山浦　清　1994a「礼文島浜中2遺蹟の調査」『考古学ジャーナル』No.371：10-12

山浦　清　1994b「外国考古学の動向　北東アジア」『日本考古学年報』No.45：53-55

山浦　清　1995a「環オホーツク海文化構想」『月刊文化財』No.146：1-2

山浦　清　1995b「サハリン・ウスチ＝アインスコエ遺蹟の考古資料」『Mouseion』No.41：1-4

山浦　清　1998　The Sea Mammal Hunting Cultures of the Okhotsk Sea with Special Reference to Hokkaido Prehistory, *Arctic Anthropology*, Vol.35(1): 321-334.

山浦　清　1999a「考古学から見た環オホーツク海文化交流」『環オホーツク』No.6：1-18（紋別市）

山浦　清　1999b Prehistoric Hokkaido and Ainu Origins (with USHIRO Hiroshi), in W. Fitzhugh and C. Dubreuil (ed.), *Ainu: Spirit of a Northern People*, pp. 39-45 Smithsonian Institution and University of Washington Press.

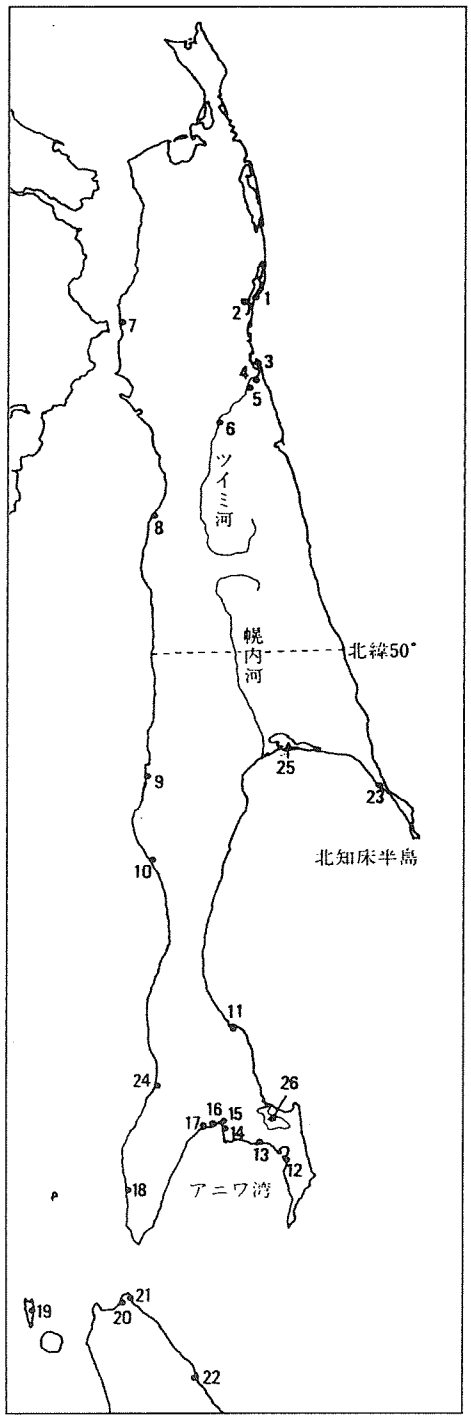
山浦　清　2000「続縄文から擦文文化成立期

にかけての北海道・本州間の交流」『現代の考古学』5巻（交流の考古学），朝倉書店：73-94

訂正

本論中の土器の説明において，「サハリンにおけるオホーツク文化の形成と変容・消滅」シンポジウムのレジメとは異なる点がある。それは筆者の怠慢によるものであるが，事実認定は本論の説くところによっていただきたい。

図版作成にあたっては，天野哲也氏，木山克彦氏のお世話になった。深く感謝する。



1	チャイヴォ	Чайво
2	ヴァール	Вал
3	ヌィヴォ	Ныво
4	ノグリキ	Ноглики
5	イムチン	Имчин
6	ヌィシュ	Ныш
7	ポギビ	Погиби
8	アレクサンドロフスク	Александровск
9	恵須取	Углегорск
10	来知志	Айнское
11	栄浜	Стародубское
12	遠淵	
13	長浜	Озерск
14	南貝塚	
15	鈴谷貝塚	
16	江の浦	
17	留多加	
18	十和田	
19	香深井	
20	オンコロマナイ	
21	泊内	
22	北見枝幸	
23	テルペーニエ	Терпение
24	本斗	Холмск
25	多来加湖	Оз. Невское
26	富内湖	Оз. Тунайча

Fig.1 Main archaeological sites and towns in Sakhalin

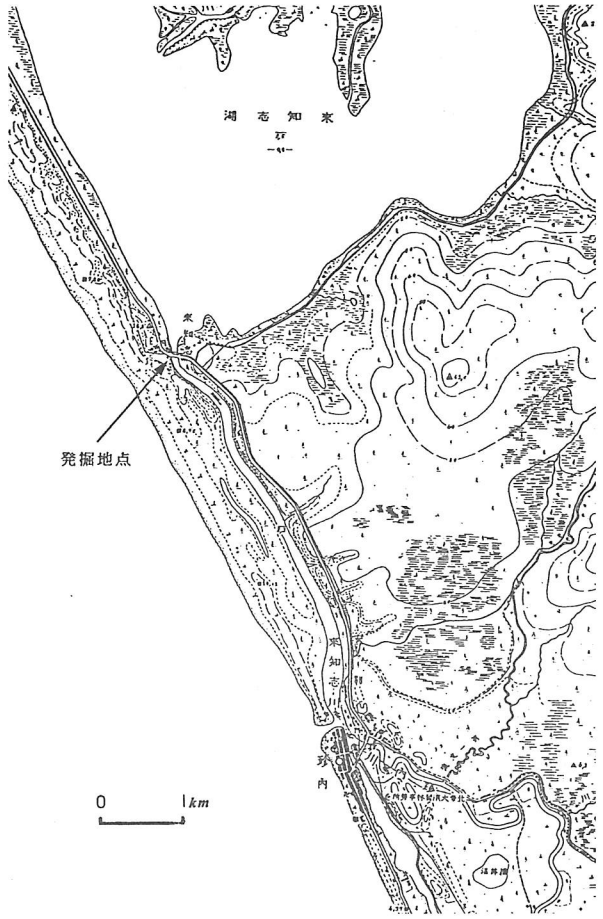


Fig.2 Location of the excavated area

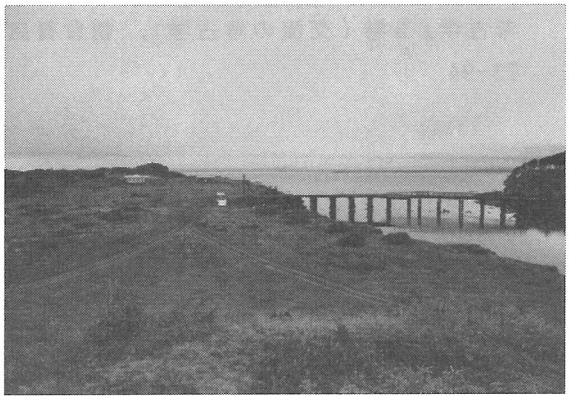


Fig.4 遺跡遠景（南から）
Distant view of the excavation
(from the south)

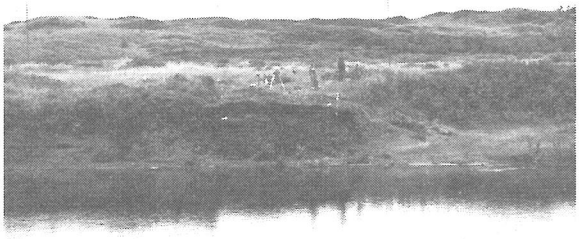


Fig.5 遺跡遠景（対岸から）
Distant view of the excavation
(from the opposite side of the revier)

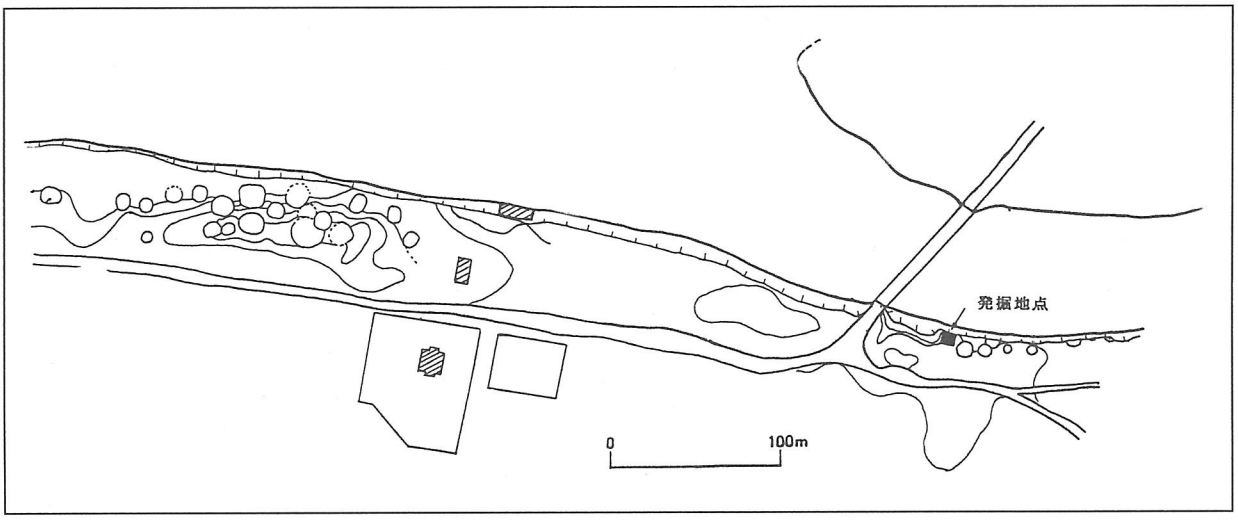


Fig.3 Detail map of the excavated area

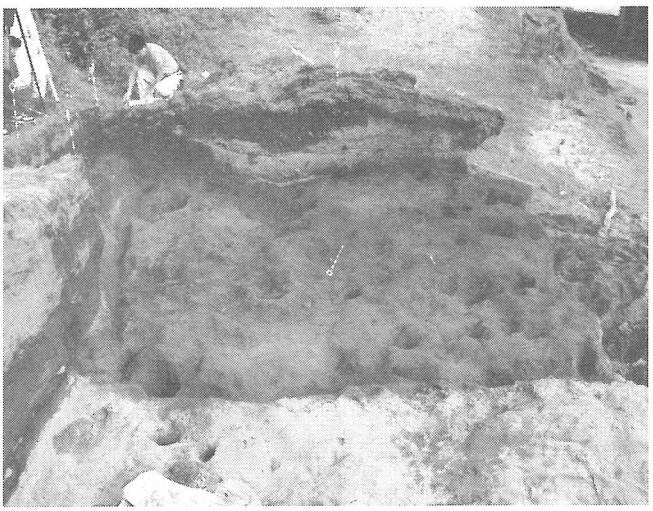


Fig.6 発掘された竪穴住居（南から）
Pit-dwelling unearthed
(from the south)

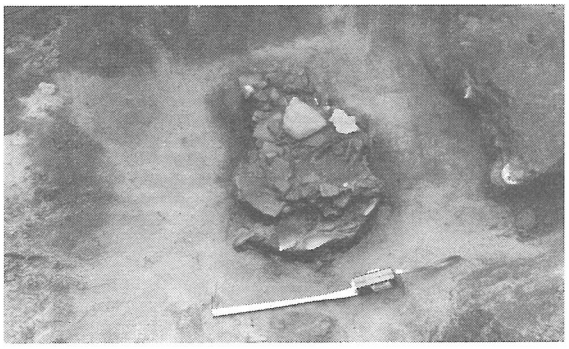


Fig.7 炉址で発見された土器出土状態
Pottery fragments found in the

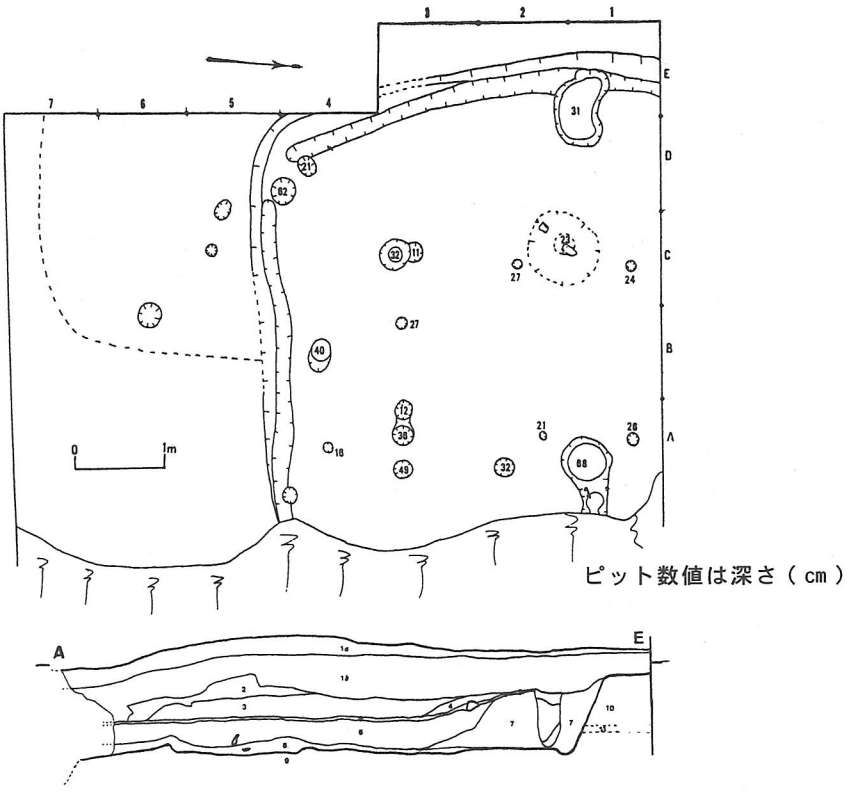


Fig.8 Plan and cross section of the excavated area

(Number in or near each hole shows the depth from the floor)
1:surface sod; 2:grey sand with charcoal; 3:grey soil; 4:grey sand with charcoal; 5:organic material layer; 6:black soil; 7:black sand with ash; 8:layer just above the floor; 9:brown hard sand; 10:yellow sand; and 11:black soil

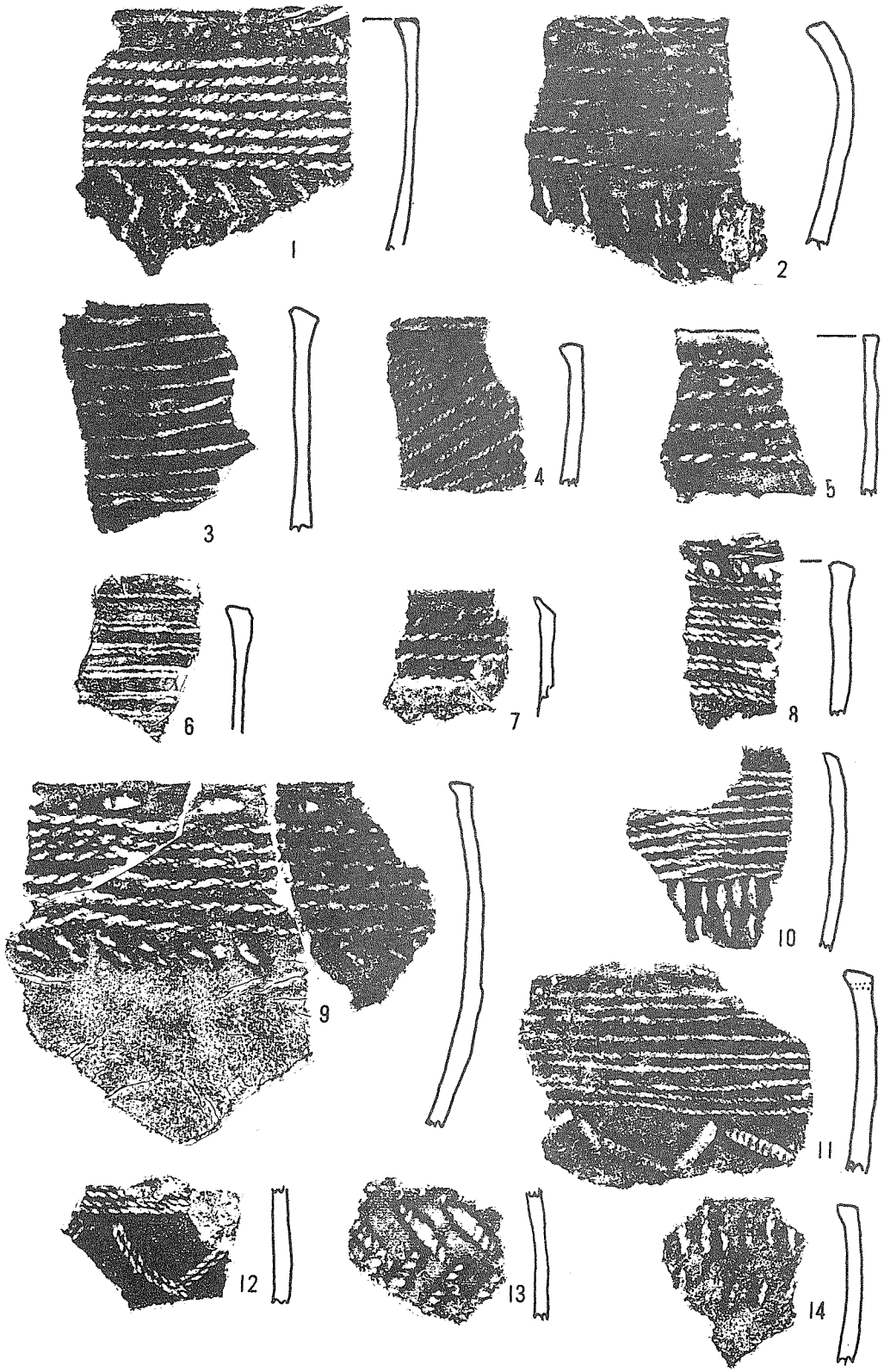


Fig.9 Pottery from the pit dwelling (1) Scale 1/2

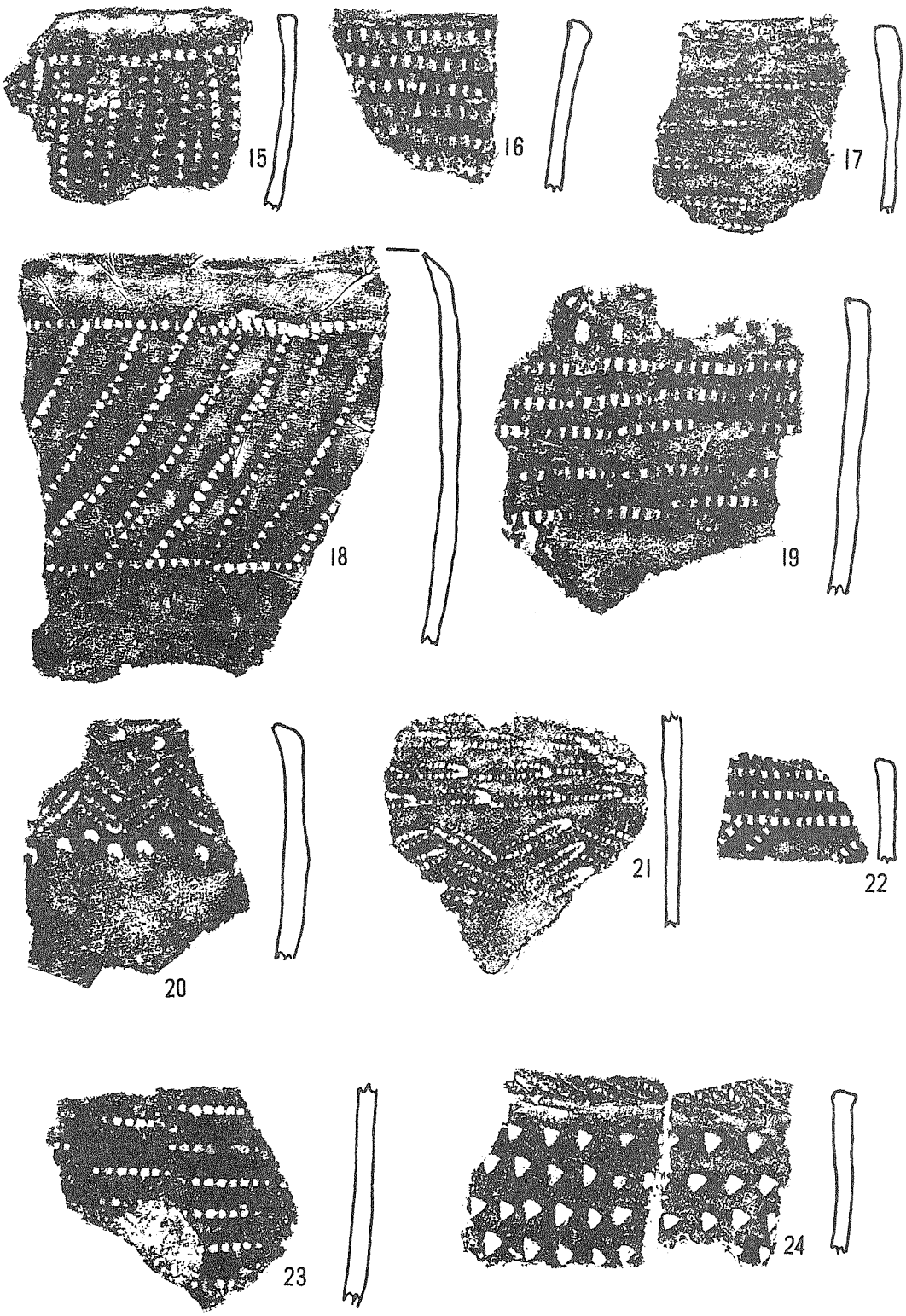


Fig.10 Pottery from the pit dwelling (2) Scale 1/2

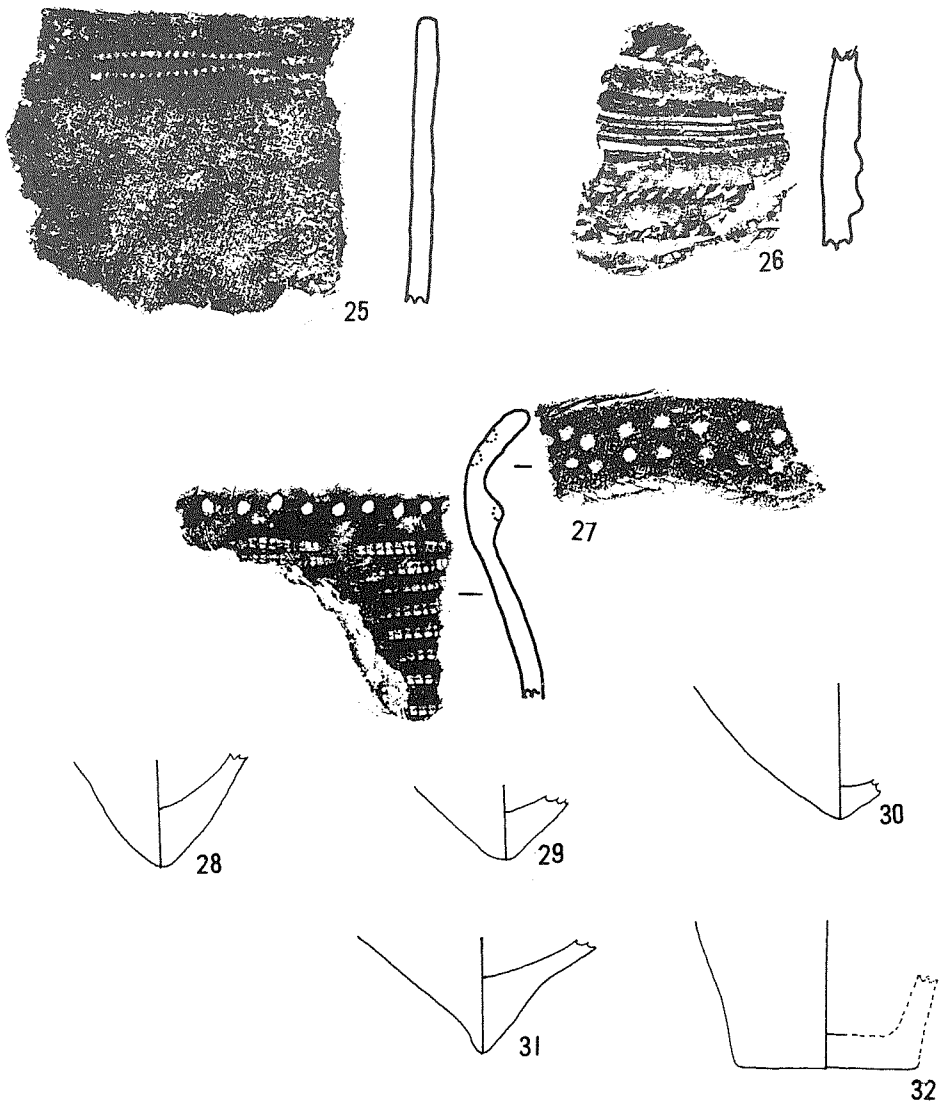


Fig.11 Pottery from the pit dwelling (3) Scale 1/2